

オーリングエンアカデミー2008 報告書

東北大学4年 日下雅広

1. はじめに

2007年度インカレロング、インカレミドルにおいて優勝し、かつユニバーの代表にも選ばれたこともあり、海外遠征、オーリングエンアカデミーに参加するというのは割とすんなりと受け入れられた。行く気満々になっていた。ただ、そのユニバーの影響でオーリングエン5日目までの参加ができないということが分かったときは残念に思った。また、ロング・ミドルと優勝してしまったせいでアカデミー権利取得者が減ってしまったことは非常に残念であった。

2. 遠征の日程

- 7/14 昼 家を出る
- 7/15 出国（成田）→フランクフルト経由→ストックホルム
- 7/16 スtockホルムから Mora へ→O-Ringen Academy
- 7/17 Lecture, Training, Trip
- 7/18 Lecture, Training, Trip
- 7/19 Lecture, Workshop（準備）, Training
- 7/20 WOC Relay 観戦, Workshop（実践）, Opening ceremony
- 7/21 O-Ringen Stage 1, Lecture
- 7/22 O-Ringen Stage 2, World cup sprint 観戦
- 7/23 O-Ringen Stage 3, Lecture
- 7/24 ユニバー組と共にストックホルム→タリンへ
- 7/25～8/3 ユニバー
- 8/5 出国（タリン）
- 8/7 帰国

3. オーリングエンアカデミー

Academy という名が示すようにこのオーリングエンアカデミーはオリエンが強くなるというよりはオリエンについて「学ぶ」場であった。1日の流れとしては、オーリングエンが始まる前は午前講義、午後トレーニング、夕方（夜）観光のようなもの、という流れであった。オーリングエンが始まると、日中はオーリングエンに出走、夕方に講義という流れであった。英語での講義はなかなかストレスが溜まるものであり、オーリングエンDay2の朝6時15分集合の時に JAPAN 部屋全員が危うく寝過ごすところであった。

講義の内容は受講者のオリエンレベルが上がるというよりは、受講者がそれぞれのクラブに知識を持ち帰ってクラブ全体の底上げを図ることができる、ものだと感じた。 How

to teach orienteering」ではまず競技者のレベルを適正に判断し、そして適正な課題・コースを組んでやることで確かなレベルアップが可能となる、ということを学んだ。実際の講義では時間が足りず、上級クラスの説明を聞くことができなかったが、初級・中級クラスの説明を聞いただけでも価値があったといえる。また、そのレベル分けというのは書物となっているので、機会があったらぜひ手に入れたいものである。今回はユニバーがありその書物を見つけ出すことができなくて残念であった。

「Work shop」では実際に参加者を招いてオリエンテーリングのイベントを開くということで、準備、そして当日のコントロール設置、指導など練習会のようなことを行った。この準備がなかなか大変であった。というのも、①英語でディスカッションしなければならない②（ポイント〇になって）複数人でコース組みをしなければならないことになったことが挙げられる。①は不可避だとして、②は言語の壁を取り除いてももめそうなことである。これについてはスコア〇にするべきであったと後悔してしまった。

それでもなんとかコースは完成し、実践当日は小学生担当班とポイント〇担当班といった具合にわかれ、僕は設置・撤収を行うこととなった。異国の地で設置・撤収というのはなかなか経験できないことなので楽しかった。ただ、地図が古くコントロール付近がイカになっていたり、コントロール円が手書きであったためコース図と設置用で円の中心が違っていたりして、設置し直しに行くなど、トラブルがあった。そのため、途中で帰ってくる人が続出したのは残念であった。

トレーニングは非常に楽しかった。特に、ラフオープンがどこまでも広がるエリアでのオリエンはテンションが上がった。地面がもこもこしていて、その感覚もまた面白く、スウェーデンはいいところだなと思った。

Trip なるものもあり、車にゆられて様々なところに連れて行って頂いた。牛を見たり、moose（トナカイか？）を見たりとオリエンらしく自然と親しむ感じのものであった。

O-Ringen が始まると、レース後に講義となり、眠気との戦いでもあった。実際、2日目に危うく寝過ごすところであった。レースで自分が選んだクラスは H21 であり、これについては短くもなく長くもなく適切だったのではないかと思う。長すぎると疲れてしまうし、短いと暇をもてあますことになる。Stage が進むにつれてだんだん慣れてきてミスが減る、というのが一般的であるが、何故か僕の場合日に日に調子が悪くなっていった。それでも落ち込むわけでもなく、むしろ「次こそは」と次のレースに気合いが入っていた。そういった意味では気負いすぎてしまったのかもしれない。

残念ながら5日目までいることができず、途中で帰ることになってしまったが、別れを惜しんで Academy 参加者がケビンに訪れておみやげをくれるなど優しい方が多かった。さらに、Mora まで車で送ってくれるなど運営者にも非常にお世話になった。この点、感謝したい。

4. 生活面

アカデミー期間中はケビンに分宿し、朝食は各自（1人 100SEK 支給）で、昼食・夕食は合同で食べた。O-Ringen が始まると、昼食も各自で何とかするように、とのことで、日本チーム（皆川さん、関谷さん、田中君、高野さん）は同じケビンであったため自炊した。昼食、夕食は非常においしかった。洗濯はシャワールームで行い、しのいだ。

5. 感じたこと

まず自分の英語力に失望してしまったというのがある。多少英語が話せなくても移動や注文、講義を受けることは可能である。しかし、Workshop のようなディスカッションになるとどうしたらよいか固まってしまう状況になることがあった。そういうわけで、これからアカデミーに参加する人にはまず英語で話せるようにしておいた方がよいと言いたい。それと IC レコーダーを持って行って講義を録音しておく非常に役立つと思った。

講義の内容は多岐にわたっており、オリエンテーリング指導から世界の普及状況、世界トップ選手の話、GPS についてなど理解できるものから理解しにくいものまでである。自国の IOF 加盟年は？といった質問があったが、日本は誰も知らなかった。せめて自国のオリエンの歴史は調べておくべきであった。荷物に余裕があれば日本のマップを持っていくと、交流が深まって、良いと思う。

そして小話になってしまうが、会話のほとんどは英語であるが、それぞれ母国語が違っているわけで、大学で習った第二外国語の出番があった。英語以外の形での交流もまた楽しいものであった。

O-Ringen Academy が終わればそれで終わり、というわけではないことを深く感じた。学んだことを日本に持ち帰り、そして広めるという宿題が残っている。現在、なかなか時間を取れないでいるが、必ずそれをやり遂げなければいけない、と思っている。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えて下さった株式会社リテラメッド山岸倫也様、高橋善徳様、参加者として一緒に生活をした皆川さん、関谷さん、田中君、高野さんには大変お世話になりました。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。